

クラシックギターリスト

文 酒井香代 写真 三原久明

Kaori Muraji

# 村治佳織

幼い日、ギターをつま弾く

長かった髪を肩の少し上まで切り、前髪も眉の上で切りそろえた姿で現れた村治佳織さんは、どこかデビュー当時の「天才少女」を思い出させた。

そんな印象を打ち明けてみると、「天才だなんてそんな。ただ、私は、ふり返っても人に恵まれてきたとつくづく思っています」と微笑みながら答えてくれた。

まず、第一は弱冠15歳という若さでデビューできたこと。これは、クラシックギター奏者でギター教師の「父のもとに生まれたという最初の幸運」と村治さん。

弦をつま弾いていた。

「父がネックの音階をおさえて、私が弦をはじくんです」

そんな遊びから始まったギター練習は、特別なことではなく、「歯を磨いたり顔を洗うといった日常の一部」だったと言う。

父親からギタリストになりなさい

と言われた記憶はない。

「歌舞伎役者さんなど、伝統芸能の家と似ているのかなと想像したこともあります。自然と自分もギターを大人になっても弾き続けるのだからなと思っていました。ギタリストになりなさいとは言わなかったけれど、小さい頃から練習したほうがギ

ターを上手に弾けるようになるという思いはあったようです。父が大人になってから始めたことで、苦労があったのでしょうかね」

クラシックギターのソロ演奏は、主旋律も伴奏も一人で奏でる。指の動きの複雑さを習得するには、まるで日常の動作のひとつのようにギ

## 異国の風や光をまとい 胸にせまるギターの音色





ターに触れることが大切なのだろう。その期待に応えるように、いや期待以上に村治さんは腕を上げていった。

「普段の練習曲のほかに、父は、大曲も課題にしてくれ一年かけてじっくりと教えてくれました。小学校一年生の時に練習したのが、ブラジル人作曲家のエイトル・ヴィラ＝ロボスの『プレリユード4番』で忘れられません。ハーモニクスやアルペジオなど、さまざまな技術が詰まった名曲なんですよ」

村治さんは、このしつとりとした曲を練習しながら、アマゾンの奥地の風景を空想していたのだそうだ。「曲が描く世界を空想するのが好き」で、名曲の舞台を空想旅行していた。かと言ってクラシック以外にも、「聴くのは光GENJIも好きで、父にCDを買ってもらったことも覚えています。これを言うともんな安心するようですが(笑)」

#### ロドリゴ「わんこ会」に行く

奏でる音楽の向こうに世界を想像していた村治さんが、初めて外国に行ったのはヨーロッパ。デビュー後の高校時代、夏季音楽セミナーで訪問した。そして高校卒業後は、パリ

のエコール・ノルマル音楽院に留学した。

「クラシックギターが誕生したヨーロッパへの強い憧れがありました。留学先について私自身が深く考えたわけではありませんが、10歳から指導いただいた福田進一先生の薦めもあって先生と同じ学校に進みました」

日本からの留学生もたくさんいた。同じように音楽家をめざす友と送った音楽漬けの楽しい日々は、新たな気づきも与えてくれたと言う。「なかには音楽の世界に進むことを家族から反対されている友だちもいて、自分はなんてまっすぐにもこの道を進んできたのだろうかと初めて気づいたんです。それまで、別の進路なんて考えたこともなかったけれど、そういう選択肢もある。でも自分はこの道にいるのだなと意識を新たにしました」

すでに4枚のアルバムを発表していたが、その意識をもった後、もっと積極的に関わりたいと作ったのが5枚目のアルバム『カヴァアティーナ』だった。

「クラシックファンだけではなく、もっとたくさんの人に届けたい、そんな気持ちで、映画音楽なども加えたアルバムでした」

パリの留学中には、もうひとつ大きな好機が訪れた。クラシックギターの巨匠と呼ばれるホアキン・ロドリゴさんに会えたことだった。

「4枚目の『パストラル』は、ロドリゴさんの曲ばかりを集めたアルバムだったんです。そのアルバムを、ある音楽評論家の方が、ロドリゴさんに送ってくださいって、ロドリゴさんの署名付きのお礼状が来たんです」

パリに転送された手紙を受け取った村治さんは、感激し、高齢のロドリゴさんと会えるチャンスはもう二度とこないと、訪ねることを決意したのだった。

「作曲家というのは、遠くにいる神様のような存在だと思っていたので、連絡先が書いてある手紙を見て、『信じられない』という思いでいっぱい。ちょうど、テレビクルーに取材していただけのことになり、一緒に訪ねたのです」

ロドリゴさんは、耳も遠くなくなっておられたが、村治さんの演奏の前で穏やかな表情で座っていた姿はその番組で見た記憶がある。

この決意は、さらなる幸運を引き寄せた。

「娘さんのセシリアさんは、元バレリーナで、訪問以後も私に『舞台

ではこういう風に優雅にお辞儀をするといいわよ』と教えてくださったりするなど、交流が続きました。さらにセシリアさんのご主人がバイオリンリストで、その管弦楽団との共演が実現して『レスプランドール』というアルバムの誕生につながったのです」

#### 出会いが出会いをよぶ不思議

ひとつの出会いの種はまた新たな芽を出す。ロドリゴファミリーはじめ、何度も自然とそれを経験してきた村治さんだが、もうひとつ忘れられないのは、吉永小百合さんと坂本龍一さんとの出会いだと振り返る。

「小百合さんと、高校生時代に詩の朗読のCDに演奏で参加させていたのだのがきっかけで、いつも『妹のように思っている』とおっしゃってくださいるんです。小百合さんが、私が『ポート



レイツ』というアルバムに収録した『戦場のメリークリスマス』を気に入ってくださいって、2010年の〈平和への絆コンサート〉にゲストでお招きいただきました。この時、坂本龍一さんもゲストでいらしていたのです」

小百合さんに背中を押され、その舞台で坂本龍一さんとの共演を果たした。コンサートの終了後、村治さんは、意を決して坂本さんにオリジナル曲の作曲をお願いした。

「ギターにも曲を書いていただけ

ませんかとお声をかけたら、とても快く引き受けてくださいって。ただ、その後、東日本大震災が起こり、坂本さんも大変ショックを受けられて。そんな気持ちを乗り越えて、ギター曲を作曲していただいたんです。そういう背景もあるので、胸にせまる曲でいつまでも大切にしたいと思っています」

村治さんのために書き下ろされた曲は「プレリユード」で同名のアルバムに収録された。

さかのぼって2003年から



私生活でも結婚という新たなスタートがあった。伴侶は、休養に入って初めて知り合った人。つまり、この休養のご褒美のようにも聞かせる。

「私生活では、自分が育つたような家庭を築くことが目標ですね」と微笑む村治さん。

2018年の後半には新たなアルバムをリリースする予定だ。

### 【Profile】

村治佳織 Muraji Kaori

東京都出身、3歳より父・村治昇氏の手ほどきを受け、10歳より福田進一氏に師事。15歳でCDデビュー。フランスに留学し、1999年にはホアキン・ロドリゴ氏の前で作品を演奏する機会を得る。帰国後、国内外主要オーケストラとの共演を重ね、世界各地で演奏公演を行う。2016年10月、自作のオリジナル曲4作品を収録する「ラブソディー・ジャパン」をリリース。現在、J-WAVEの番組「RINREI CLASSY LIVING」（毎週土曜日20時～20時54分）のナビゲーターを務める。

は、イギリスのクラシック音楽の名門レーベルであるDECCAに移籍し、海外での活動も増えていった。

演劇の舞台や、日本の伝統楽器との共演、フランス語講座への出演、エッセイの執筆、ラジオパーソナリティーなど、多彩な分野に次々に挑戦した。

「やりたいこと、お誘いを受けて興味を持ったことには積極的に楽しんで取り組んできたのですが、その気持ち優先しすぎたのかもしれないね」

2013年、村治さんは病氣療養のため、休業宣言を発表した。

### タンザニアの旅で得たもの

それまでも右手の神経麻痺に見舞われたことはあった。

「その時は中学・高校時代の校長先生が、『神様は乗り越えられない試練を与えませんよ』とアドバイスをくださって、その言葉がすっと心に入ったからでしょうか、そんなに落ち込んだりはしませんでした。むしろ母がその時いろいろと支えてくれて、感謝の気持ちを新たにできた、いい機会にもなりました」

けれど、2013年の休業宣言は本当の「試練」だったと振り返る。

スケジュールが真つ白な日々。ギターを弾かない日々。

「当初は戸惑いましたが、昔からお世話になっている方から、『仕事のことは一切考えず、生きることを大切にしないさい』とアドバイスいただいていた肩の力が抜けて」

2年ほどの休養期間が続いた。好きな旅をしたり、音楽を聴いて過ごす日々だった。

「休養期間も小百合さんと小旅行をご一緒させていただいたりもしましたね。ちょうど小百合さんが映画『ふしぎな岬の物語』をプロデュースされた頃、体調も回復してきて。映画音楽にお声をかけていただき、参加させていただきました。休養してから初めて舞台に立ったのは、その映画のジャパンプレミアの時だったんですよ」

ファンがみな心配した休養期間だったが、それが決してマイナスの時間ではなかったことは、今の村治さんの活動や表情を見ていると伝わってくる。

『プレリユード』以来、初の新収録のアルバム『ラブソディー・ジャパン』には自身が作曲した曲も収録された。

「初めての作曲は、休養前の2012年、旅番組『旅のチカラ』

楽は神聖なものという思いも強く、

「自分は演奏家である」と心のどこかで決めつけていた。けれど、音楽は神聖なものである側面もあれば、生活の中に生き生きとしてあるものというところが、タンザニアへの旅で深く伝わってきたのだという。その体験以来、素直に気持ちや感じたことを、まるで語るように音にするこ

とができるようになった。

「なんだか日記みたいに書けばいいんだな」と思えるようになり、村治さんならではの作曲スタイルが見

えてきた。

タンザニアの旅の経験作曲したのは「バガモヨウタンザニアにて」。また新たにアメリカの女流詩人の詩に、言葉に合う音を選び抜くことで作った2つの曲も収録されている。

「長崎の五島列島への旅で生まれた曲も収録しています。頭ヶ島という島で作った曲なんです、そのことを言わずにラジオで流したら、リスナーから『頭ヶ島のことを思い出しました』と反応があった時は、なんだかうれしくなりました」

そんな話をする村治さんからは、新たな芽吹きの風が伝わってくる。

「人生観や考え方が大きく変わったとは思っていませんが、この休養期間を乗り越えて、一人で生きてきたのではないという思いや、感謝の気持ちはより深くなった気がします」

さまざまな奏法から生み出される複雑な音の重なり。それらが共鳴し、減衰する中で、いつしか心を溶け込ませてしまうクラシックギター。村治さんのクラシックギターには、同時代を共有するからこそ響く音色も込められている。同時代人の鑑賞者としていられるのは、なんと幸運なことだろう。

